法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

調査 学童期における人間関係と価値観の形成 : 中学生を中心に(序)

KAMEGAI, Sumio / 亀谷, 純雄

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 社会科学編
(巻 / Volume)
29
(開始ページ / Start Page)
59
(終了ページ / End Page)
74
(発行年 / Year)
1978-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005501

Hosei University Repository

調査　学童期における人間関係と価値観の形成（序）——中学生を中心に

亀谷純雄

一　調査の概略

調査目的　小・中学生の、いわば義務教育期間における学童の生活と意見の全般的実態を俯瞰してみる。とくに学童の生活場面を〈家庭〉〈学校〉〈地域〉に分け、それらの場面での人間関係（友達、教師、親）の在り方を軸に、それぞれの関係の仕方に現われる価値観（自己認知、自他に対する評価）、またそれぞれの場面での現われの相異を明らかにする。

とりわけ今回は、六五年の『中学生調査』[1]（法政大学心理学研究会実施）の追試の意味もある。

調査手続と特徴　各学校各学年クラスで質問紙法で意見を収集している。

調査グループの多くが現場の教師であることから、学童期に対する心理学的興味だけでなく、自分のクラスの〈学級経営〉の手掛りを得るという実践的課題を前提にしている。

したがって調査票への記入方法も、調査条件を一定にするというより、日常の授業形態に近い条件をとの前提で、質問についての理解をクラス全体のものにするため、読解の遅い対象には読みかえたり、理解がしにくいとい

Hosei University Repository

う質問には説明を加えている。

対象の抽出　以上のような理由から対象の抽出は、無作意抽出をさけ調査主体の関与しうる範囲での学校・クラスを選んだ。そのため、現在の日本の学童の代表性を有しているとはいいがたい。とくに地域特性などの属性、サンプルのサイズの問題である。その意味で本調査は現在の学童の頭をぶつけている問題点を掘りおこすということでのパイロットサーベイと言える。

対象(数)・地域

小学校二年……一四七(男七四、女七三)　板橋区一校一クラス、練馬区一校一クラス、八千代市二校二クラス、

小学校五年……一〇七(男五六、女五一)　練馬区二校三クラス

中学校二年……一三五(男六八、女六七)　葛飾区一校一クラス、幕張市一校一クラス、松戸市一校一クラス、戸塚区一校一クラス

学年選択理由　学童期の年齢差による意見の変容をみるため、小・中学生をカバーした。小学校二年、小学校五年については、発達の質的転換点が三〜四年生にあることから、それ以前と以降に分けた。二年生については、質問紙法という条件を満すためにその可能性の下限であると判断したからである。小学生五年、中学二年については、受験を目前にするという特殊条件をはずすという意味で選んだ。(2)

質問項目　項目の選択は中学生への質問を軸にし、六五年実施調査項目と比較することもあり、それを下敷にした。項目数四四。以下小学生には、それらの質問が読み書き出来る範囲でという判断で選び、ワーディングを変更した。小学校五年三八項目、小学校二年二二項目。

今回のまとめは、以下の項目の中で、家庭・家族関係を中心に報告する。

家庭……両親の評価　・両親への注文　・親に叱られたこと(頻度、内容、どう感じたか)　・手伝い　・両親との話題　・理想の両親像

学校……・クラスの友達関係　・クラブ活動への参加　・学校生活の中のコミュケーション　・友達との話題

・学校生活で楽しかった事

Hosei University Repository

地域・その他……・遊びと勉強（仲間、場所、内容）・塾・ヒマの使い方

注(1) 六五年都区内八校、都下一校の中学二年生三九八名を対象に意見調査を行った。それは、六〇年代に入っての中学生への社会的関心の広がりを前提にしており、その関心の多くが〝現代っ子〟という言葉に代表されるように、マイナスあるいは批難の意味をこめたものであることについての疑問が、調査の出発点にあった。

学童あるいは青年に対しての関心の所在は、戦後「アプレ犯罪」に始まり「太陽族」（高校生）、「高校三年生」、「ハイ・ティーン」、「ロー・ティーン」、「現代っ子」と年齢層が下降しているのが特徴でその内容は、学童・青年の中での例外的傾向から一般的傾向へと見方を移行させる。六五年調査時では、この波は小中学生をその中に含みこんだ社会的関心となっている。だがその関心の方向、広がりは、戦後の新教育等の教育改革に対する反動が、義務教育にまで降りて、その全般にわたる攻撃が開始されたということで、たとえば、教育の制度的な改変が意識の面で多くの人々に定着をみせた証拠ともいえる。

今回の調査は、前回から一〇年隔てた七六年の中学生を対象にしており、時間軸の相異によって反映された時代相への関心がある。

注(2) 調査・分析にあたって学童の特徴を学齢の相異を手掛りに相対化することを考えたが、それは単に生活年齢の高低による発達水準・段階の差をみることではない。今日の時点で、学童がそれぞれに反映を受けている、諸矛盾の現われ、その特徴に視点をすえることである。その意味で、精神発達区分としての学童期（児童期）の範囲を越えて、青年期と区分される中学生を含め学童期と呼んでいる。

そこで共通項としてイメージされるのは、主体的に選択された人間関係の有り方、その質の転換過程ということである。学校では幼児期の家庭での相互依存的な親子関係を脱し、教育過程に入ることで人間関係の組み替え、広がりを要求し、それは計画された教科、教授の目的意識的な筋道にそって組織化される。その組織化された人間関係が、自他の関係の認識を具体的なものから抽象的なものに、いいかえれば社会的諸関係の反映としての自己存在の認識を深化させることでなる。ということは、可能態としての人間関係の発展と深化の過程は、常にその内に反映された社会的矛盾を含みこんにいるわけで、その点について本調査がアプローチ出来ればよいと考えている。

Hosei University Repository

二　結果と考察——家庭・家族関係

a　両親の評価

中学生が自分の両親にどのような見方をしているのか、とくに話し合える相手として考えているのかを聞いてみた。選択肢は必ずしも一元性のあるものではないが、大別して「話し合える」「話し合えない」「無関心」に分かれる。多少質のちがう質問として「尊敬していないが同情している」というのがその他として入っている。

「話し合える」とする回答は、父親に対して五一・一％、母親に六四・四％と、母親に高い。その高い比率だけ、母親には「友達のように話しあえる」ことになって、親近感が強い。「尊敬していて話もできる」は、若干父親に高いが、「友だちのように……」接することのできる間がらほどは、父親母親の差がない。

「話し合える」という回答は、両親に対しのプラス評価と考えていいだろう。したがって、「話し合えないが尊敬している」という選択肢もプラスに含めることができる。すると、父親、母親に対して差がなく七割近くの中学生が好評価を与えている。ただし、「尊敬しているが話し合えない」とする者は、父親に対して高く、母親への親近性と反対に、ある距離を父親に感じているようだ。そしてその距離は、「無関心」として父親に対して現われる。これには、父親に対す

表1

評価 ＼ 性別		話し合える 尊敬して	話し合える 友達のよう	話し合えない 尊敬するが	話し合えない 嫌い	尊敬していないが同情	無関心
('76) ＜父親＞	男	38.2(%)	16.2	23.5	1.5	7.4	8.8
	女	35.8	11.9	19.4	1.5	7.5	11.9
	計	37.0	14.1	21.5	1.5	7.4	10.4
＜母親＞	男	35.3	27.9	7.4	0.0	10.3	4.4
	女	31.3	34.3	9.0	3.0	4.5	3.0
	計	33.3	31.1	8.1	1.5	7.4	3.7
('65) ＜父親＞	男	44.4	14.6	20.5	2.5	7.9	5.4
	女	36.7	8.9	28.3	2.8	5.0	9.4
	計	41.3	12.3	24.0	2.6	6.7	7.2
＜母親＞	男	38.6	28.4	7.6	3.8	8.1	4.2
	女	39.0	32.6	10.2	1.6	8.0	4.8
	計	38.8	30.3	8.7	2.8	8.0	4.5

Hosei University Repository

る評価、接触の問題として重要な事柄が含まれているが、とりあえずは、全体の結果から、両親に対して多くの中学生が、それほど否定的な評価を加えていないことをまずおさえることが大切だろう。

性別の差をみると、男子は父親への接触が高く、女子は母親にというパターンが見られる。「友達のように話し合える」の回答傾向がそれである。「尊敬して話し合える」の項をみると、女子が母親に対してそう思ってるよりも、男子のほうが高い。しかし、これは、女子の母親への「尊敬」度の低いことをいうより、もっと親密に話し合える相手として母親を見ていると考えるべきであろう。「友達のように」母親と「話し合える」が、女子の選んだ一番目になっている。

のこりの項目で性差がみえる所は、女子の父親に対しての「無関心」と、男子にとっての母親が、「尊敬はしていないが同情している」存在であることが目につく（一〇・三％）。この選択肢は、父親・母親とも七・四％で差がないのだが、父親のそれは、距離感を前提にしての回答であるのに対して、母親には、親近感を前提にしているといってよいだろう。したがって、その内容の質の違いが類推できるように思う。そうすると、父母に対しての「無関心」の回答傾向も、「同情」と同じ根を持っていることになるのだが、この、両親に対する接触の密度と内容は後に検討することにする。

以上の結果を一〇年前と比較してみると、全体として、両親に対してのプラス評価は下降してきている。その中で父親は、今にもまして話しにくい存在だが、尊敬の対象にはなっている。「……話し合える」「尊敬しているが話し合えない」をたすと、父親七七％、母親七七・八％である。その父親への尊敬は、「友達のように話し合える」率を下げている。さらに、その反動かもしれないが「嫌いだから話も出来ない」という回答比は、六五年時点でのほうが高い。その意味で、「尊敬」が反発をひき起すような中身であることはおさえておく必要がある。

母親に対しては、全体の傾向と同様七六年では「尊敬している……」が減り、その分「友だちのように……」という関係に移行している。女子の母親に対する接触がそれである。

性差は、七六年の傾向とほぼ一致しており、唯一、男子の「尊敬はしていないが同情している」と回答した比率が、七六年に顕著にみえる。六五年時点では男女差はない。

Hosei University Repository

通覧すると、この一〇年の隔りは「友達のように（両親と）話せる」ことができるようになったものの「尊敬」を前提にした話し合いは減少する。また「話しあえない」者も「尊敬」を前提したそれは、同様に下降する。結果として、それらの減少は、両親と「話し合える」とする者の比を下げ、その分「無関心」へ移行することになる。とくにその傾向は、父親に対して強い。

b　両親への注文

両親に対する評価では、「友だちのように話し合える」関係が増してきているものの、「無関心」が比例して増加していた。そのことは、関係の中身・あり方に問題があるように思える。そこで、親に対しての注文をみることで、親子関係の中でぶつかっている問題点を採ってみる。

最も目につく点は、「注文なし」の回答である。父親に対して三三・三%、母親にも三三・三%ある。質問の方法が自由記入であることから、書きこみが減ることはやむをえないが、三分の一がなしというのは多い。無回答についても、父親に四〇%、母親に三七・八%ある。実際に回答している者は、父親に二六・七%、母親に二八・九%にすぎない。とくに「ない」とする回答は、男子に多くそれも父親に対しての比率が最も高い。四一・二%ある。また、男子は母親に対しても高く、三八・二%である。

女子は、父親に対しての「無関心」が男子に比べて多かった割りに、以外と父親への注文が多い。

注文が多いということは、人間関係のぶつかり合いがあって、不満が多いということだろうが、それを注文という形で表現できるほうがまだ良い。「注文なし」「無回答」は、親が理想的なので注文することがないということより、今さら注文をだしてもというようなとまどいやあきらめの表われであることのほうが強いのではないだろうか。「両親の評価」の所でもその傾向がでている。

六五年時点でも「注文なし」は多かったが、今回ほどではない。父親に対して二五・四%、母親へは二七・〇%であった。「注文なし」「無回答」を除いた回答率では、父親に三九・一%、母親に三六・七%である。

「注文の内容を多いところからみると、父親母親に対してとも、「小遣いをふやせ」という現実的な注文が多

Hosei University Repository

い。その次に、父親に対して「話し合えるようにして欲しい」「理解してものわかりよく」「やさしくして」「かまって、関心を持って」などの注文が、女子に目立つ。一三・五%ある。とくに「話しあえるように」四・五%、「理解してもの分かりよく」七・五%、と父親とのつながりを言っている。そのことは、父親は、まず話し合えない、話し合えたとしても通じないという父親との現実的人間関係を前提にしているわけで、「怒るな」「文句が多い」という注文が九%もある所からみると、父親娘関係の疎遠さ、父親の家庭での生活態度が浮び上がってくる。一方的なかたちでの子どもの人格を無視した無関心とカライバリということになる。

女子に比べて男子は、父親に対しては、「小遣いをふやせ」以外は、注文はほとんどない。先述したように、男子は「注文なし」に見られるように、まったくの関りを父親から断ち切っている。注文の出ている項目をひろっても以下のことぐらいしかない。

・怒るな、文句が多い……二・九%
・話し合えるよう……一・五%
・かまって欲しい、関心を持て……一・五%

女子の父親関係は、その他に「もっと自由に」一・五%、「協力して欲しい」一・五%と少いが、やはり関係のちぐはぐさに言及している。唯一、特徴的な注文は「健康に注意」「酒・タバコを飲みすぎず」九%で、六五年時点で出ていた「甘過ぎる」「貫録をつけて」（二・六%）というような、一種の〈たのもしい男性〉への期待の注文は陰をひそめ、注文というより一種の親心（?）が表われる。

母親に対する注文は、父親に対してよりも男女とも項目が多くなる。しかし、どの注文が多いかについては集中がみえない。ただ、女子は、母親との関りが強いこともあってか

・もっと自由に……四・五%
・理解してもの分かりよく……四・五%
・話し合えるよう……三・〇%
・怒るな、文句が多い……四・五%

Hosei University Repository

などが目立つ。一見父親に対しての注文の頻度に似ているが、それは「兄弟にだけ甘くするな」三%、「自分に対する態度をよく」一・五%に見られるように、関り方についてではあるが、関り方の内容についての注文に、その特徴がある。

男子については、話し合えたり、理解して欲しいという注文は少く「勉強しろというな」二・九%が、女子と違った特徴を示している。その他の注文については、父親に対しての場合ほどではないにせよ「注文なし」が目立ち男子の家庭内での親との関りのなさを特徴づけている。そのことは、程度の差こそあれ、女子にも同様の傾向を言うことができる。

表2

学齢＼性別	父親 男	父親 女	父親 計	母親 男	母親 女	母親 計
	(%)					
中 2	33.8	28.4	31.1	30.9	46.3	38.5
小 5	71.4	66.7	69.2	87.5	86.3	86.9
小 2	82.4	84.9	83.7	91.9	91.8	91.8

六五年時点では、男女子とも親に対する注文は、今回よりもはるかに広い部分にわたっていた。とくに親‖加害者対被害者の関係について言われていることの多い今回に比べ、「社会的に関心を持って」「もっとしっかり」という注文が母親に出ている。身近かにいる一個人としての人格に対して出された注文といえる内容を持つが、今回はない。あるいは「勉強のことに関心を持って」「もっときびしく」などである。父親にも、「早く帰って」「一緒に進んで」「家族のレクリェーションを考えて」「外出をするな」「職場のことを口にしない」など、自分との関係をつなげていくためだったり、つくっていくような意味での注文がみえた。

このようにみてくると、親は無視するか、対立するか、（それも消極的にであるが）そのような存在として特徴づくことになる。

c　親から叱られたこと

両親への注文の中で、「怒るな、文句が多い」は比較的多かった。とくに父親に対しての注文として目立ち、女子に集中する。そこで、叱られた内容をみることで、家庭内の人間関係のもたれ方をさらに拾いあげてみる。女子の場合、母親に対してもこの注文が多

Hosei University Repository

表3　（実数）

	中2						小5						小2					
	<父親>			<母親>			<父親>			<母親>			<父親>			<母親>		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
計	21	17	38	19	33	52	39	37	76	42	32	74	50	60	110	58	64	122
行儀	3	2	5	—	5	5	4	6	10	3	6	9	10	3	13	9	6	15
生活規範	3	2	5	4	5	9	8	2	10	8	5	13	11	16	27	22	21	43
けんか(兄弟)	2	1	3	2	1	3	6	6	12	5	7	12	9	15	24	9	7	16
いたずら	—	—	—	1	—	1	3	2	5	3	1	4	9	5	14	10	5	15
勉強	4	3	7	9	6	15	8	8	16	11	6	17	1	6	7	3	7	10
テスト	2	—	2	—	—	—	3	—	3	1	—	1	3	5	8	2	7	9
手伝い	—	2	2	—	12	12	—	1	1	1	4	5	1	1	2	—	—	—
言うことを聞かない	2	6	8	—	4	4	5	6	11	6	3	9	—	4	4	—	5	5
その他	5	1	6	3	—	3	2	1	3	4	—	4	6	5	11	3	6	9

い。この両親への反発は、先の所でその前提となる関係・役割のあり方が父母によって違うのではないかと仮説したが、その点について自由記入を吟味してみることにする。

その前に、「最近両親から叱られたことがあるか」について聞いている。（表2）

中学二年生は、父親から三一％、母親から三九％となり、母親からの比がたかい。この傾向は、学齢を下げてみてもかわらず、母親との関係が強い。中学生から、小学校五年生、二年生をみると、叱られる頻度は次第に高くなっている。さらに、中学生の特徴は、父親と男子、母親と女子という関係がみえ差がある。性別による両親からの叱られ頻度の分化は、男子のほうがはやく小学校五年生にその特徴がみえ始めている。叱ることの分担が家庭の中にある、ということだろうか。

自由記入をみると、父親の場合、とくに何について重点的にということではなさそうである。若干男女差がみえるのは、男子に対して「勉強・テスト」（二一中六）がめだつ。しかし、このことについては、母親のほうが高い（一九中九）。他「行儀」「生活規範」「兄弟げんか」「（なんとなく）言うことをきかない」というのがあげられている。女子に対しても同様である。しかし、父親からの女子への場合、「言うことを聞かない」（一七中六）に集中している傾向には特

Hosei University Repository

徴がある。言うことを聞かないことの内容が、不明瞭である。なんとなく父親の、偶然的な気分の悪さに影響されているようだ。

それに対して母親の女子への叱り方には、ポイントがある。まず「手伝い」のことが中心におかれ、「行儀」「生活規範」のことと続く。「生活規範」というのは例ば、『外出が多すぎる』『朝起きるのが遅い』など、家庭内での関係を保つためのきまりのようなものを考えた分類であるのだが、女子の場合、女の子のくせにいう内容がみられる。いってみれば、女子のための行儀という特徴がみえる。この点、男子に対して、「行儀」についての叱り方はゼロである。この男女差は、女子には、家庭での職分としての「手伝い」を位置づけ、男子に対しては「勉強」のこと以外は、あまり叱らないという図式がみえてくる。したがって、父親の女子に対して「言うことを聞かない」から、という叱り方は、女子のこのような言うまでもない職分が前提にあるかもしれない。

通覧すると、父親は、家庭内での叱る事柄についての役割を持っていない、男女ともはなれた関係としてある。母親には、とくに女子に対して叱ることの内容の集中がみえたが、男子には、「勉強」を除いて関りがみえない。

小学校五年、二年をみると、両親の子どもに対しての叱り方は、中学生ほど差がなく全般に渡っている。ただ、中学生でみられた、女子「手伝い」は、小学校五年生でその傾向が表われている。母親の女子に対してである。

d　手伝い

中学生になると手伝いは、女子の場合、家での仕事として言うまでもなく課せられる事実であるようだ。男子は、そのことにかかわってこない。したがって「手伝い」をめぐっての衝突は、両親と女子の間で頻発することになる。

しかし、次の傾向の回答をみると、女子だけに「手伝い」が課せられている、ということではないという結果がみえる。

全体で「手伝い」をすると回答した者は六七％あり、男子の場合でも六二％もある。「手伝う」と回答した中で

Hosei University Repository

表4

	よく手伝う	時々手伝う	あまり手伝わない	全然手伝わない	無回答
	(%)				
計	11.1	55.6	24.4	8.1	0.9
男	11.8	50.0	26.5	10.3	1.5
女	10.4	61.2	22.4	6.0	0.0

表5

	自分からすすんで	親にいわれて	話し合って	その他	無回答
	(%)				
計	44.4	52.2	10.0	5.6	6.7
男	35.7	54.8	9.5	7.1	2.4
女	52.1	50.0	10.4	4.2	10.4

表6

	決っている	ちがう	決っていないが同じなる	無回答
	(%)			
計	17.8	26.7	54.4	1.1
男	16.7	38.1	42.9	2.4
女	18.8	16.7	64.6	0.0

も「よくする」という比は、男女差がない。「時々手伝う」という回答で、男女に一一%の開きが見え、その点でいえば、女子のほうが「手伝い」の頻度が高い。しかし、前にみたように、何で叱られるかに表われた男女の差ほどに差はなく、家庭内での「手伝い」比は高いといえる。

「手伝う」と回答した者について、動機を聞いてみた(MA)。すると、「親に言われて」五二%と最も多い。しかし「自分から進んで」と回答した者も四四%あり、それほど〝しかたなく〟というわけではなさそうだ。三番目に「話し合って」が一〇%ほどである。

男女差の目立つ所は、「自分からすすんで」の項目で、女子に多く五割近くもある。こうみてくると、「手伝い」は、女子にとって(男子もそうかもしれないが)、一方的に課せられたものではないようだ。

しかし厳密にみると、ここでいわれる手伝いは、家族成員の中でそれぞれに分担された仕事の一部ではない。この質問のねらいには、「手伝い」が、応々にして親の仕事の下請けであって、一個人としてまかされた仕事ではないことについて調べるねらいがある。その点について、「手伝い」に対しての主体的かかわりを聞いているのだが、しかし、数字に出た積極性は、「両

Hosei University Repository

親との話し合いの中で、相互に認め合っているか」ということを前提していないそれであり、さらに「手伝い」の内容をみると、「いつも決っている仕事」とする者は、全体の二割に満たない。その他は、「決っていないが同じ仕事」「その時によって違う」ということである。

「話し合って」手伝いを決め、さらにその仕事が「決まっている」と回答した者は、全体で三名しかいなかった。この傾向からすると「手伝い」は、よく手つだうにせよ、自分から手伝うにせよ、仕事の内容は、親との合意なしの今までの習慣や、その時その場で決められた事柄にすぎない。習慣化した「手伝い」を、家庭での役割の分担の自覚化という方向でプラスに評価することはできるが、前節で母親が女子に対して「手伝い」のことで叱る内容をみると、女子の家庭での「手伝い」は当然のことで、『さぼる』『やらない』ということと、『(そうじ)の仕方が悪い』ということに集中する。このことは、何についてどう手伝うかの相互了解がない、と同時に手伝いが、仕事としてその能力に応じて「まかせている」との見通しがない。いわば下請けで、失敗は叱られ、やらないと叱られるということになる。分担された仕事としての手伝いは、その中に個人の責任の内で失敗することも含まれているはずである。

女子に「決ってないが同じ」が多くみられるのは、この習慣化した暗黙の、とくに親側の了解が前提にされているのではないか。「いつも決っている」の内にも、その傾向があるのではないか。

このように、一方的な「手伝い」に対しての了解は、常にその場主義的なものになり、不満・反発を生じさせることになる。

男子の場合も女子と回答傾向は似ている。ただ、女子ほどには「手伝い」が「決まった」内容を持っていないようだ。しかし、前節で見たように、男子の「手伝い」に対する引っかかりのなさを、この数字の結果からは読みとれない。

e　親との話題

この質問は、今までみてきたように、父親の家庭内での役割（位置）の喪失や、男子の両親からの距離、などの

Hosei University Repository

表7

		学校	将来	友達	異性	勉強	成績	政治社会	家事（家のこと）
		(%)							
〈父親〉	小 2	61.2	32.7	41.5		55.9	65.3		36.7
	小 5	52.3	29.0	41.1		48.6	40.2	18.7	39.3
	中 2	39.3	34.8	27.0	3.0	36.3	38.5	11.1	16.3
〈母親〉	小 2	59.9	31.3	50.3		68.7	72.8		42.9
	小 5	76.6	35.5	68.2		68.2	54.2	22.4	40.2
	中 2	54.1	27.4	43.7	5.9	37.8	38.5	2.2	28.9

結果を前提にしているのだろうが、回答の中にそれは読みとれない。質問が多項選択であったので、選択されたそれぞれの項目についての集中が高い。したがって父母との話題の全般的傾向について指摘するのに留める。

父親との話題は、「学校」のことが多く、「成績」「勉強」「将来」のことと続く。五番目に「友達」の話題がみえるが、母親の場合は話題として高い。

母親をみると、「学校」のことは父親と同様、話の中心になっているようだ。次に「友達」である。「勉強」「成績」と続き、五番目に「家事」がくる。

こうみると、父親との話題の特徴は「将来」のことにあり、男女ともあまりかわらない。母親の場合「家事」にあるといっていい。この項目は、女子に圧倒的に高く四〇%もみられ、したがって男子との話題としては小さい。このことは、今までみたように女子の家事（手伝い）の役目の特徴を引きづっているといえる。

もう一つ父親の特徴として「政治・社会」についての話題が、数は小さいが母親との違いとして現われている。こうみてくると、父親、母親とも共通の話題の中心は、「勉強」「成績」にあり、それ以外で母親は、生活や人間関係の身近かな所での話題という特徴が、父親は、それらと距離を置いた事柄についての話題の特徴がみえる。その意味で、両親の子どもへの接触の特徴がでていると、いえないことはないが、話題の中心が共通して「勉強、成績」にあるというのは、子どもにとっての親との話は、これに占められているといってもよいだろう。

学齢を下げてみると、中学生にみられるような親によっての話題の分化は気にならない。全般に母親との話題の集中がみえるのは、ある意味で、当然で接触の度合が高いことによるだろう。そこで、話題の順位でみると、父親の場合、中学生でみられたように、「友達」や「家事（小学生の場合、家の事という質問）」などの身

Hosei University Repository

表8　悩みをうちあける相手

	父	母	兄	姉	友達	先生	その他	いない	無回答
	(%)								
'76年	7.4	20.7	1.5	3.7	59.3	4.4	3.7	18.5	4.4
'65年	10.8	37.8	3.3	7.1	35.5	2.0	3.8	19.4	3.8

近かなことについて話し合いがある。また母親でも「将来のこと」「政治・社会」について、むしろ父親よりも頻度が高くあらわれる。

中学生の父親は、一面で社会的視点に立った話題に特徴があるといえるが反面、それは具体的な生活・人間関係を切り落しているといえるのではないか。その意味で母親は、その正反対の位置にいる。そして唯一の一致点は、勉強成績ということになる。

この話題の内容、あるいは親子関係の中で話されることの中に、相互にとってとくに子どもにとっての切実な問題が含まれているだろうか。

〈悩みをうちあける相手〉を中学生に回答してもらうと、一番目に親はあがってこない。半数以上が「友達」である。次いで母親となり、親でも父親は下がる。もちろん、女子は母親に対して、男子は父親に対してという傾向はあるのだが、話題がいくら豊富といっても、親とのそれは単に話という水準で、人間的な話し合いへ繋らない。さらにそれは、親との話題で「勉強・成績」について多かったことや、叱られたことの内容からみると、その悩みが多いだろうと推測できる。しかし、その悩みを打ちあける回路がとざされているのではないか。

また、「打ちあける相手がいない」とする者が全体で二割弱いることもみのがせない。このことは、この報告の対象外だが友達関係の変容に裏うちされている。家庭内での人間関係の希薄さは、密度のある関係を友達の中に形成するということではなく逆で、家庭のそれに比例している。

六五年をみると、悩みを打ちあける相手のトップは母親で、次いで友人となり、今回はこの関係が逆転している。この一一年間の経過が、父親からだけでなく母親からも関係を喪失させているといえるのではないか。

f　理想の両親像

Hosei University Repository

表9

	子どもの近辺にで気配を配る子どもにあまりしない干渉しない	子どもを全面的に尊重し、子どもの意志にまかせる	親として権威を導持ち子どもを持く	子どもの人格を認め話し合い社会性を導中から社会性を持つよう導く
'76年	3.5(%)	8.2	23.1	60.3
'65年	14.1	31.1	23.0	28.9

全体に中学生の両親への接触、その内容は希薄になってきているようだ。それは、一方で学齢が上がるにつれてであるし、他方六五年からの一一年間の推移の中にみられる。学齢があがることによる親ばなれは、学童の発達にとって必然的な原因ともいえるし結果ともいえる。しかしその推移も、くり返す順序性にあるわけでなく、七六年を規定する歴史社会状況に規定されている。しかしその点の分析は、学童の家庭以外の場面での人間関係の現われをみることで可能だが、今回の報告の範囲にない。そこで、今までの結果を前提に自分の理想とする親の像を聞いてみた。

「子どもを全面的に尊重し、子どもの意志にまかせる」が男女とも最も高い。次いで「子どもの人格を認め、話し合いの中から社会性を持つよう導く」である。このそれぞれの回答の特徴は、両方とも子どもを「尊重」あるいは「人格を認める」所にあるのだが、一方は、全面的に子どもにまかせる、いってみれば直接的かかわりを持たず〈見守る〉ということである。他方「話し合い」という交渉の中から、親が導くという、積極的かかわりを理想としている所にある。

そして後者を理想とする傾向は、六五年時点で圧倒的で、かかわりを持たないとする意見は少数であった。今回「……あまり子どもに干渉しない」を含めると四五%を占めることになる。今までの結果にみえた、両親との関係の希薄さは、より一そう増幅されているようにみえる。親の子どもへの関係は、子どもに全面的にゲタをあずけるか、遠まきにしてみているだけということになる。「子どもに干渉しない」という傾向は、六五年時点には子どもよりむしろ母親に高くみられていた。

その点、「親として権威を持ち子どもを導く」理想像のほうが、現在をふみ切板にした最も積極的な像なのかも知れない。ここでの「権威」は、なにも自分の上に君臨する絶体的力の要請ではない。むしろ「人格」に近い。子どもは〈親が子どもの人格を認める〉ようにま

Hosei University Repository

た、〈子どもは親の人格を認める〉。その相互に認め合う人格は、親子の立場の違いを明確にし、具体的な家庭の場の中で、親子のまっとうする責任を明らかにする。その意味での「権威」。

したがって、今日では、「子どもの人格を認め」といういい方の内容は、認めて欲しいあるいは話がしたいという一方交通的な要求に近いのではないか。

しかし、この一一年の推移は、親子の関係をより引きはなす方向を示しているようだ。